

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(8) : 異形の織物4 : 襷状の織物

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	277
ページ	71-73
発行年	2004-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5198

縦横無尽

タテとヨコの 色とカタチの ファイールドワーク

吉本 忍

異形の織物4 鬘状の織物

奇妙なかたちの袋

鬘状の織物は四角形の織物の一部が隆起した状態、あるいは陥没した状態に織られている。そうした鬘状の織物をわたしはじめて目にしたのは、ペルーのリマにある天野博物館 (Museo Amano) であつた。

先に2月号 (275号) で紹介したように、わたしは1999年9月から翌年1月まで、ペルーの首都リマにある天野博物館で客員研究員として、同館所蔵のプレ・インカやインカの時代につくられたアンデスの染織関連の考



写真1 鬘状織物でつくられたプレ・インカの袋 (天野博物館蔵)

古資料を調査した。展示場と収蔵庫で多種多様な染織関連資料を1点ずつ観察しているうちに、奇妙なかたちをした袋を見つけた。それは長方形の織物を二つ折りにして両端を糸でとじ合わせてつくられたプレ・インカの袋で、その袋の両側にはそれぞれ3個、合計6個の小さなポケット状の袋が付属していた。よく見てみると、小さなポケット状の袋も両端がとじ合わされていたが、二つ織りになった織物とポケット状になっている織物は、連続して織られていることがわかった。すなわち、この袋は鬘状の織物によってつくられていたのである (写真1)。

鬘状の織物を使ってつくられたプレ・インカの袋と同様の袋は、今なお、ペルーやボリビアのアンデス高地でつくられており、アンデスの成人男性が嗜好品としているココアの葉を入れて肩からかけるための袋として使用されている。1999年10月にボリビアの憲法上の首都、スクレにある織物博物館 (Museo Textil-ASUR) を訪問したおりに、そうしたココア袋をつくるための鬘状織物が、織り途中の状態で展示されていた。それはボリビア中部のトラブコ地方のもので、翌日からはトラブコ地方で機織りの調査をおこなったが、このときは残念ながら鬘状織物の機織りが

いかにして織るか

アンデスの機織りに使用されているおもな織機には、腰機 (back tension loom)、地機 (ground loom)、枠機 (frame loom)、高機 (treddle loom) がある。鬘状の織物はボリビアのトラブコ地方では壁などに立てかけた枠機を使用して織られているが、ペルーでは腰機を使用して織られている。ただし、織機が枠機のばあいと腰機のばあいでは、タテ糸の保持方式が異なるのみであつて、鬘状の織物を織るための織りの基本は変わるところはない。

さて、それでは鬘状の織物はいかにして織られているのか。一般的な機織りでは、タテ糸は整経のさいにすべて同じ長さにそろえられる。しかし、鬘状の織物を織るためには、整経段階に長短2種類のタテ糸が用意される。このうち長いほうのタテ糸の一部が鬘を織るために使われる。また、長いタテ糸と短いタテ糸の長さの違いが10センチあるとすると、この10センチという長さは鬘となる織物部分のタテ糸の長さとなる。以下は、ピトゥマルカで調査した鬘状織物の整経から織りあがりまでの作業工程であり、このときにはアルパカの糸を使って、一つのポケット状の袋をともなったココア袋をつくるための鬘状織物が織られた。

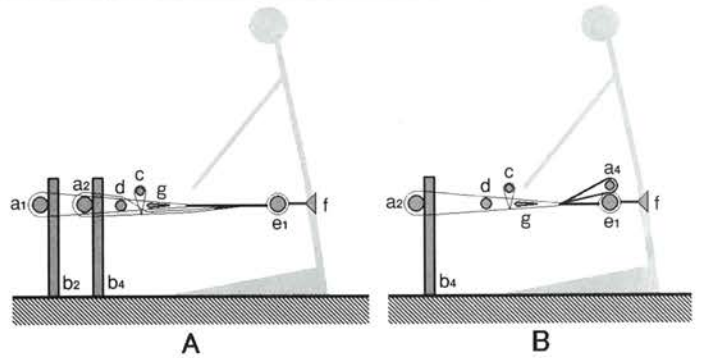
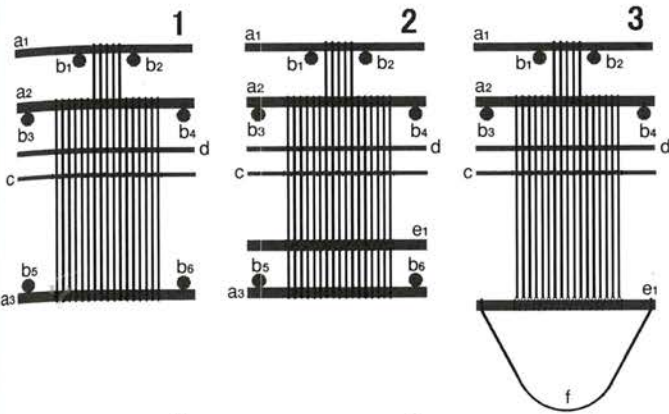


図1 襷状織物を織る腰機の構造
 A—図2-5に対応、B—図2-6に対応
 a1~a2、a4—タテ糸保持棒、b1~b4—杭、c—綜統（輪状綜統）、
 d—開口保持具（中筒）、e1—タテ糸間接保持棒、f—腰紐、g—緯打
 具

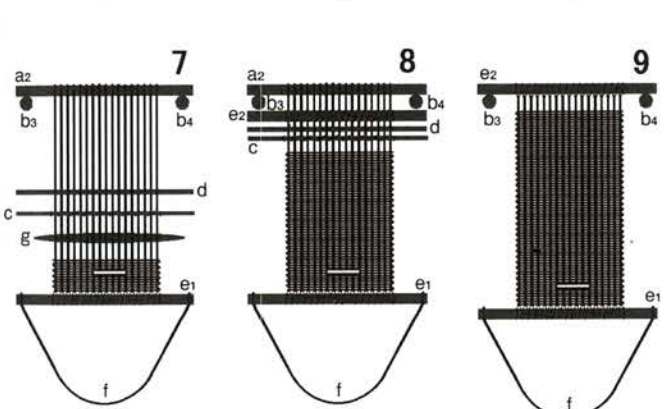
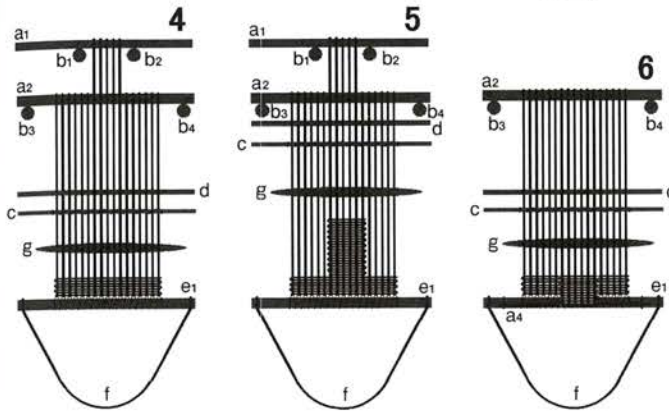


図2 整経と機織りの作業工程
 a1~a4—タテ糸保持棒、b1~b6—杭、c—綜統（輪状綜統）、d—開
 口保持具（中筒）、e1~e2—タテ糸間接保持棒、f—腰紐、g—緯打具

①杭（b1~b6）にわたした3本のタテ糸保持棒（a1~a3）のうち、a1とa3のタテ糸保持棒、およびa2とa3のタテ糸保持棒に、それぞれタテ糸を8の字状にかけわたして平整経式の整経をおこない、整経後のタテ糸に綜統（輪状綜統/c）と開口保持棒（中筒/d）を組み込む。

②タテ糸の上面に置いたタテ糸間接保持棒（e1）に、タテ糸保持紐をラセン状に巻きつけながらタテ糸をすくい取る。（図2-2）
 ③整経のさいに使用したタテ糸保持棒（a3）と杭（b5・b6）を取りのぞき、タテ糸間接保持棒（e1）を手前に引いてから、その両端に、織り手の腰にまわした腰紐（f）を結びつける。（図2-3）
 ④機織りがはじまり、5センチあまり織り進む（図2-4）。この段階から⑧の作業工程に至るまでは、棒状の緯入具と刀状の緯打具（g）を使用して機織りがおこなわれる。また、タテ糸をさばいたり、ヨコ糸を部分的に打ち込むための緯打補助具として、先を尖らせたリヤマの骨が使われ、さらに紋織りに必要となるタテ糸をすくい取るため

の緯打補助具として、リヤマの骨よりも小さめで、やはり先を尖らせたアルパカの骨が使用される。
 ⑤タテ糸保持棒（a1）と、タテ糸間接保持棒（e1）にラセン状に巻きつけられたタテ糸保持紐によって保持されている中央部の長いタテ糸にのみヨコ糸を交叉させ、長短2種類のタテ糸の長さの違いと同じ長さだけ織り進む。（図1A、図2-5）
 ⑥タテ糸保持棒（a1）と杭（b1とb2）を取りのぞいたのちに、中央部の長いタテ糸を手元に手練り寄せ、細いタテ糸保持棒（a1）を差し入れて、中央部の織り進んだ部分を手前に引っ張り、細いタテ糸保持棒（a1）の両端をタテ糸間接保持棒（e1）に紐で結んで固定する。（図1B、図2-6）
 ⑦すべてのタテ糸に対してヨコ糸を交叉させて織り進む。数センチほど織り進んだ段階で細いタテ糸保持棒（a1）を取りのぞき、襷状（Ω状）に隆起した織物部分を織り途中の織物の裏側に押し込む（写真4）。さらに、押し込んだあとに開いた口を針を刺し込んでとじ合わせる。（図2-7）
 ⑧再び織り進み、織り残したタテ糸が少なくなると、綜統と開口保持棒によるタテ糸の開口や逆開口の操作が難しくなってきた段階で、タテ糸の上面に置いたタテ糸間接保持棒（e2）に、タテ糸保持紐をラセン状に巻きつけながらタテ糸をすくい取る。（図2-8）

⑨タテ糸保持棒（a2）に代えて、タテ糸間接保持棒（e2）を杭に固定し、綜統と開口保持棒を取りのぞいたのちに、針でタテ糸をすくいながらヨコ糸を通し、タテ糸を織り残すことなく織りあげる。（図2-9）



写真3
鬘状織物の機織り（ペルー、ピトゥマルカ：2002年）



写真4
鬘状に織りあがった部分を織物の裏側に押し込む
（ペルー、ピトゥマルカ：2002年）



写真5
鬘状織物でつくられたカメルーン、バメッシングの袋（カメルーン、バメッシング：1987年 / 井関和代氏撮影）



写真2
鬘状織物でつくられたピトゥマルカのココ袋

以上のような作業工程をへて織りあがった鬘状織物は、二つ折りにして両端を縫い合わせて袋に仕立てられる。さらに中央部の鬘状部分も同様に縫い合わせてポケット状の袋となる。写真2のココ袋は、ピトゥマルカで調査したさいに織られていた鬘状織物でつくられたもので、この袋の縫い合わせ部分などには、

筒状織物とおぼしき飾り紐が縫いつけられている。しかし、この紐が筒状織物であるか否かは未確認であり、この点については、2月から急遽ペルーに行くことになっていて、2月で、あらかじめ確認してくる予定である。

なお、ココ袋を仕立てるさいには、上記のような飾り紐のほかに、2月号で紹介した丸紐状の織物ニヤウイ・アワバを使用している例も少なからず見いだされる。また、前記の鬘状織物の作業工程の記述ではとくに触れていないが、ペルーのピトゥマルカやポリビアのタラプロコ地方の鬘状織物は、いずれもタテ糸浮織技法によって織られた紋織物であり、天野博物館のブレ・インカの袋に仕立てられた鬘状の織物も同じくタテ糸浮織技法で織られている。

アフリカにもある鬘状織物

さて、これまではペルーの鬘状織物を紹介

してきたが、同様の鬘状織物はペルーやポリビアなどのアンデス高地以外に、アフリカのカメルーンでも織られている。カメルーンで鬘状の織物を織っているのは、北西州バメッシング高原のバメッシングに住むティカール人で、かれらが杵機を使ってラフィア椰子の繊維で織っている鬘状織物もアンデスのばあいと同様に袋に仕立てられている。わたしは2000年12月に現地調査をおこなったが、残念ながらこのときもポリビアにつづいて鬘状織物の機織りを目にする機会には恵まれなかった。ただし、このカメルーンの鬘状織物については、大阪芸術大学の井関和代教授が調査されている。詳細については、『大阪芸術大学紀要（芸術）11』を参照されたい。

（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授／

よしもと・しのぶ

文献

井関和代

1989年

「バメッシング高原・バメッシング村に於ける「ラフィア染織」について」『大阪芸術大学紀要（芸術）11』、大阪芸術大学